

# R5(2023)年 共通テスト本試 『俊頼髓脳』

次の文章は源俊頼としよのが著した『俊頼髓脳としよのまどう』の一節で、殿上人たちが、皇后寛子のために、寛子の父・藤原頼通の邸内で船遊びをしようとするところから始まる。

みやづかせ

係助詞

適当・意志

1 宮司ども集まりて、船をばいかがすべく、

皇后に仕える役人達は集まって、

船ふね(の装飾)をどうするのがよいか(を相談して)、

もみぢ

紅葉を多くとりこやりて、船の屋形にして、船さし

紅葉こうじ(の枝)をたくさん取りに行かせて、

それを船の屋根に(装飾)して、船を操作する人

さぶらい同格

婉曲

已然形

こほか

は侍の若からむをさしたりければ、俄に

は侍で

若いような人を

指名したところ、

急遽、

(指名された者たちは)

かりばかま

過去

狩袴染めなどしてきらめきけり。その日になりて、

狩袴を(催しに相応しく)染めるなどして、華やかに飾り立てた。

その日になって、

完了

完了 疑問

人々、皆参り集まりぬ。「御船はまうけたりや」と

人々は、

皆、参集した。

「御船は準備したか」と

尊敬 過去・已然形

尋ねられければ、「皆まうけて侍り」と申して、

お尋ねになったので、

「準備万端に整っております」

と申し上げて、

こ

こ

い

完了

已然形

その期になりて、島がくれより漕ぎ出でたるを見れ

その(=船遊びの)時間になって、

(池の)島陰から

漕ぎ出た船を

見る

ば、なにとなく、ひた照りなる船を二つ、装束き

と、一部ではなく全て、

ひたすら輝いている船を二艘(とも)、

飾り立てている

存続

て

断定

過去

こころぞ

出でたるけしき、いとをかしかりけり。

様子は、

非常に趣が深かった。

2 人々、皆乗り分かれて、管絃の具ども、御前くわんげん  
人々は、皆（二艘に）分れて乗って、管絃の楽器類を、  
皇后寛子

より申し出だして、そのこととする人々、前におき  
から お借りして、そのこと（＝演奏）をする人々を、前にいさせて、

て、アやうやうさしまはす程に、南の普賢堂に、  
徐々に（船を）漕ぎ回す（＝動かす）うちに、南の普賢堂（の前に来ると、そこに、

宇治の僧正、僧都の君と申しける時、御修法して  
宇治の僧正（＝寛子の兄）が、「僧都の君」と（人々が）お呼び申し上げた頃、（皇后への）加持祈祷を

おはしけるに、かかることありとて、もろもろの僧  
していらつしやったが、「このようなこと（＝船遊び）がある」ということで、多くの僧

たち、大人、若き、集まりて、庭にゐなみたり。  
たち、年配者も 若い者も 集まって、庭に並び座っている。  
存続・完了

童部、供法師にいたるまで、繡花装束きて、  
稚児や お供の僧に至るまで、花模様の刺繡の装束を着て、

さし退きつつ群がれるたり。  
繰り返し（近づいたり）離れ（たりして）、群がって座っている。  
存続・完了

3 その中に、良暹といへる歌よみのありけるを、  
その中に、りやうぜん 完了 主格 過去  
良暹といった 歌人がいたが、

殿上人、見知りてあれば、「良暹がさぶらふか」と  
殿上人（たち）が、顔見知りであったので、「良暹が（そこに）控えておるか」と  
疑問

問ひければ、良暹、目もなく笑みて、平がりて  
質問したところ、良暹は、目を細めて笑って、（畏まって）（返事として）平伏し

さぶらひければ、かたはらに若き僧の侍りけるが（状況を）

已然形

同格

連体形

已然形

知り、「よむに侍り」と申しければ、「あれ、船に

理解して、（良運の代わりに）「そつでございます」と申し上げたところ、（殿上人たちは）「彼を、船に

れんが

サ変 使役 仮定

推量

召し乗せて連歌などせさせむは、いかがあるべき」  
呼んで乗せて、連歌などをさせるとしたら、 どうだろうか」

已然形

と、いま一つの船の人々に申しあはせければ、

相談申し上げたところ、

適当・当然 打消

「いかが。あるべからず。後の人や、さらでもあり

「どうだろう。（そんな行為は）あつてはならない。後世の人々が『そつ』」良運を乗せる（でなくても

強意適当・当然 過去

詠嘆 引用疑問

推量

已然形

ぬべかりけることかなとや申さむ」などありけれ  
十分だったのになあ』  
と申し上げるだろうか」など（の意見が）あつたので、

引用

打消

ば、さもあることとて、乗せずして、たださながら

「それ（」後世に批判を受けること（も）きつと（あること（」と思つて、乗せないで、単にそのまま

サ変 使役 強意意志

連歌などはせさせてむなど定めて、近う漕ぎよせ

（」地上にいさせるままで（連歌などをさせてしまおうなどと決めて、（良運の（近くに漕ぎ寄せて、

慣用句（然り+強意+適当（婉曲

サ変

て、「良運、さうぬべからむ連歌などして参らせ

「良運、（この催しに）相応しいような連歌（の発句）などを詠んで献上しなさい」

尊敬 已然形

よ」と、人々申されければ、さる者にて、

と、（船上の（人々が申し上げたところ、（良運は歌人として知られるに（相応しい者

疑問

引用

存続・完了

過去 断定

もしさやうのこともやあるとて。まうけたりけるに

で、「もしかすると、そのような（」発句を求められる（こともあるか（」と思つて準備していたのだろうか

疑問挿入句

や、聞きけるままに程もなくかたはらの僧にもものを

（依頼を（聞いたやいなや、（すぐに

側の僧に何か

言ひければ、その僧、「いじじつとしく歩みよりて、  
言ったところ、その僧は、仰々しく「もったいぶって（船の方に）歩み寄って「近づいていて、

「もみぢ葉の「こがれて見ゆる 御船かな  
みふね  
「もみぢ葉が焦がれて」「色じいて（いるように見える、漕がれる御船だなあ

と申し侍るなり」と申しかけて帰りぬ。  
完了  
と申し上げますということですよ」と言葉をかけ申し上げて帰った。

4 人々、これを聞きて、船々に聞かせて、付けむ  
使役  
意志  
人々は、これを聞いて、二艘の船（の人たち）に（発句を）聞かせて、「続きを詠もう」

としけるが遅かりければ、船を漕ぐともなくて、  
引用  
已然形  
としたが、（続きを思いつくのが）遅かったので、船を（しっかりと）漕ぐのでもなく、

やうやう築島をめぐりて、一めぐりの程に、付けて  
徐々に 築島を廻って、  
「一周する間に、  
続きを

言はむとしけるに、え付けざりければ、むなしく  
意志引用サ変  
逆接 副詞  
打消 已然形  
詠もう」としたけれども、続きを詠むことができなかったので、無駄に

過ぎにけり。「いかに」「遅し」と、たがひに船々  
完了 過去  
過ぎてしまった。「どうだ（できたか？）」「（そっちも）遅い」と、互いに二艘の船（の人たち）が  
ふた  
「既に」一周になってしまった。  
副詞  
あらしそひて、二めぐりになりにけり。なほ、え付け  
言い争って、

ざりければ、船を漕がで、島のかくれにて、  
打消 已然形  
打消接続  
ことができなかったので、船を漕がないで、島の陰で、

「ウかへすがへすもわるきことなり、これを今まで  
断定  
「ウかへすがへすもわるきことなり」  
悪い事態である。  
これ（＝続き）を今まで

打消係助詞

完了

サ変適当(むず)

付けぬは。日はみな暮れぬ。いかがせむずる」と、  
詠まないのは。日はすっかり暮れてしまった。どつするのがよいだろつ」と、

意志

打消接続

強意婉曲

今は、付けむの心はなくて、付けでやみなむことを  
今(となつて)は、詠もうという気持ちは無くて、  
続きを詠まない終わってしまうようなことを

打消自動詞 完了

嘆く程に、何事も。覚え<sup>e</sup>ずなりぬ。  
嘆くうちに、(茫然として)何も考えられなくなつてしまった。

5 ごとごとしく管絃の物の具申しおろして船に

仰々しく

管絃の楽器を(お願い)申し上げて、貸していただき

船に

完了 過去 逆接

乗せたりけるも、いささか、かきならす人もなくて  
乗せられども、少しも、かき鳴らす人もいなくて、  
(船遊びは)

完了 過去

やみにけり。かく言ひ沙汰する程に、普賢堂の前に  
終わってしまった。(船上の殿上人たちが)このように言い争ううちに、  
普賢堂の前に

完了

完了 過去

そこばく多かりつる人、皆立ちにけり。人々、  
とても多くいた人々は、みんな立ち去つてしまった。人々は、

意志

已然形

船よりおりて、御前にて遊ばむなど思ひけれど、  
「船から降りたら、皇后の御前で管絃の宴をしよう」などと思つ(てい)たけれども、

このことにたがひて、皆逃げておのおの  
この予定とは違つて、みんな逃げてそれぞれ

完了 過去

サ変 存続 過去 逆接

失せにけり。宮司、まうけしたりけれど、いたづら  
姿を消してしまった。皇后に仕える役人は、(室内での宴の)準備をしていたけれども、無駄に

完了 過去

にてやみにけり。  
終わってしまった。